

令和 2 年 5 月 11 日現在

機関番号：12301  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2016～2019  
課題番号：16K12235  
研究課題名(和文) 地域住民に対するエンドオブライフケアの意思決定とアウトカムを高めるケアシステム  
  
研究課題名(英文) Developing end-of-life care system that enhance can do decision making of the community residents  
  
研究代表者  
内田 陽子(Uchida, Yoko)  
  
群馬大学・大学院保健学研究科・教授  
  
研究者番号：30375539  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：地域住民に対するエンドオブライフケアの意思決定を促すプログラムを開発した。これにより、住民だけでなくケア提供者にも啓蒙できた。病院や施設で意思決定支援のケアを明らかにできた。また、高齢者向け住まいにおけるアドバンスケアプランニング支援EOLCパスの開発と有用性を明らかにした(アドバンスケアプランニングとは将来の意思決定能力の低下に備えて、事前に受けたいケアを計画し、話し合うプロセスをいう)

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は地域住民に対するエンドオブライフケアの意思決定の理解を高め、意思決定を促すことに貢献した。また、地域住民の意思決定を実現するケアシステムの構築のために、パス開発により可視化できたことは社会的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：We developed program of the end-of-life care(EOLC)that enhance can do decision making of the community residents. Doing this, we can promote residents and care providers' decision making about EOLC. We clarify the characteristics of the decision-making support care at facilities and hospital. In addition to verify the usefulness of EOLC pathway to aid in advanced care planning for elderly assisted living residents that would ensure their EOLC wishes were respected.

研究分野：医歯薬分野

キーワード：地域住民 エンドオブライフケア 意思決定支援 アドバンスプランニング アウトカム システム

## 1. 研究開始当初の背景

わが国は超高齢少子社会を迎え、多死社会ともなっている。厚生労働省は人生の最終段階における意思決定を促すためのアドバンス・ケア・プランニング(Advance Care Planning: ACP)を提唱していた。このことは、専門職が主体でなく、地域住民自らがエンドオブライフケア(End Of Life Care: EOLC)の意思決定ができるように、また、その医師を実現できるようなEOLCのアウトカムを高めるケアシステムを構築する必要性があることを示している。このような背景のもと、本研究を開始した。

## 2. 研究目的

- 1) 地域住民のためのEOLCの意思決定を支えるための教育研修プログラムを開発し、実施、評価を明らかにする(2016 - 2018年度)
- 2) 1)より、最後を迎えたい場所に施設ニーズがあることが明らかになったため、施設におけるEOLCにおける意思決定支援の実施状況を明らかにする(2017年度)。
- 3) 地域住民のEOLCにおける意思決定を促すために、最後まで住み慣れた地域で生活するための地域包括ケアシステム、各種サービスに対する研修会を開催して、住民の最後に迎えたい場所と在宅サービスに対する期待の程度を明らかにする(2018年度)。
- 4) EOLCを受ける場所として最も多い病院において、自宅に帰りたくと訴えていた入院高齢患者が自宅で亡くなることのできた患者・家族の背景や実施されたケアを明らかにした(2018年度)。
- 5) 上記の1 - 4)の研究より、地域住民のEOLCへの意思決定支援のケアシステム(アセスメントからアウトカム評価を含むケアパス)を開発し、実用性を確認する(2019年度)。

## 3. 研究方法

- 1) 研究目的1)の方法: 地域住民を対象に研修前後に質問紙調査を行い、研修会への理解の程度、研修会前後での最後を迎えたい場所の意思決定、それに関連する要因について、統計ソフトを使って解析を行った。
- 2) 研究目的2)の方法: 全国の特別養護老人ホーム(特養)及び介護老人保健施設(老健)各1000箇所をランダム関数で抽出し、本人や家族に対するEOLCの意思決定支援実施率についての質問紙調査を行った。そして、特養と老健別に本人と家族の意思決定支援実施率の比較分析について統計ソフトを使って解析した。
- 3) 研究目的3)の方法: 地域住民を対象に最後を迎えたい場所とサービス期待度の質問紙調査を行い、統計ソフトを使って解析を行った。
- 4) 研究目的4)の方法: A病院に入院し自宅に帰りたくと訴えていた高齢者を受け持った看護師に対して、自宅で亡くなることのできたか、その患者に対して実施されたケアに対する質問紙調査を行った。意思が実現できた患者の特徴的なケアについて統計ソ

フトを使って解析を行った。

- 5) 研究目的5)の方法：文献検索及び老人看護の専門家の意見にもとづき、地域住民の EOLC への意思決定支援のケアシステム（アセスメントからアウトカム評価を含むケアパス）を開発し、B 県内のサービス付高齢者住宅の管理者に対して、システムの項目の実施と有効かどうか質問紙調査を行い、統計ソフトを使って解析を行った。

#### 4. 研究成果

##### 1) 地域住民及びケア職員に対する EOLC 意思決定支援に関する啓蒙と普及

開発した教育研修プログラムは各地で地域住民（1,000人以上）に実施され、啓蒙・普及できた。また、地域住民だけでなく、医師や看護師、ケアマネジャー、訪問看護師、介護職員等、多くの EOLC ケアに携わる者に対して研修会の依頼を多く受け、啓蒙・普及ができた。

##### 2) 病院や施設での本人への EOLC 意思決定支援についての実態と意思決定を促すケアの明確にできた

病院における自宅に帰りたい意思を実現する有効なケアは、「緊急時の病院連絡・入院体制整備」であった。施設では本人よりも家族における支援の実施率が高く、実施率は職員の満足度も高まることがわかった

##### 3) 高齢者住まいにおける意思決定支援パスを開発でき、実用性が確認された。

以上の成果を受けて、4) - 6) において研究成果の公表ができた

##### 4) 日本エンドオブライフケア学会での研究発表や講演での成果公表

・内田陽子、田島紫乃、茂木裕里、エンドオブライフケア研修会受講後の地域住民とケア提供者側のニーズ比較、日本エンドオブライフケア学会第1回学術集会、2017.9月16日。

・茂木裕里、内田陽子、田島紫乃、地域住民に対するエンドオブライフケア研修会前後の意思決定の変化、日本エンドオブライフケア学会第1回学術集会、2017.9月17日。

・内田陽子、田島紫乃、茂木裕里、エンドオブライフケア研修会後の地域住民の希望、日本エンドオブライフケア学会第1回学術集会、2017.9月17日。

・鈴木峰子、内田陽子、自宅療養を望み自宅死となった非がん終末期高齢入院患者の特徴、日本エンドオブライフケア学会第1回学術集会、2017.9月17日。

・内田陽子、エンドオブライフに必要なケア、EOL を支える専門職委員会セミナー、日本エンドオブライフケア学会第2回学術集会、2018.9月15日

・福島千尋、内田陽子、小山晶子、施設 EOLC 時期別にみた利用者・家族の意思決定支援実施状況の特徴（その1）- 施設全体からみた分析 -、日本エンドオブライフケア学会第2回学術集会、2018.9月15日。

・内田陽子、小山晶子、福島千尋、施設 EOLC 時期別にみた利用者・家族の意思決定支援実施状況の特徴（その3）- 介護保険施設が必要だと思ふ EOLC の意思決定支援 -、日本エンドオブライフケア学会第2回学術集会、2018.9月15日。

- ・福島千尋、戸谷幸佳、内田陽子、梨木恵実子、河端裕美、齊田綾子、宮澤真優美、相場健一、鈴木峰子、福田未来、小池彩乃、高齢者向け住まいにおける ACP を支援する EOLC パス原案の作成、日本エンドオブライフケア学会第 3 回学術集会、p122、2019.9 月 14 日.
- ・吉田恭子、梨木恵実子、内田陽子、戸谷幸佳、高齢者向け住まいにおける ACP を支援する EOLC パス、第 66 回北関東医学会総会、p19、2019 .

#### 5 ) 論文や雑誌掲載による成果公表

- ・Yoko UCHIDA,Shino TAJIMA、Chieko KUBOTA,Yri MOGI, Wishes of Community Residents for End-of-Life Care-Analysis of Free Descriptive Questionnaire Answers Given after EOLC Seminar,Japanese Journal of Nursing Care Research, 16 (4),43-50,2017 .
- ・Yoko Uchida, Yuki Moki, Chieko Kubota, Change in the Preference of Place of Death Among Community Residents through the Intervention of an End-of-Life Care Seminar, Advance in Clinical and Translational Research ,2(3) : 1-9,2018.
- ・鈴木峰子、内田陽子、小山晶子、自宅療養を望み自宅死となった非がん終末期高齢入院患者の特徴 - 患者・家族の状況と入院中に実施された看護に焦点をあてて -、日本エンドオブライフケア学会誌、2 ( 1 ) 13-20,2018.
- ・戸谷幸佳、梨木恵実子、吉田恭子、内田陽子、高齢者向け住まいにおける ACP 支援 EOLC パスの開発と有用性 実施率と必要性の検討 -、群馬保健学研究 40:8 - 17,2019 .
- ・内田陽子、介護・福祉の場における ACP、在宅新療、4 ( 5 ) 491 - 495、2019.
- ・内田陽子、エンド・オブ・ライフケア講演会前後における最後を迎えたい場所が在宅と選択した要因、日本エンドオブライフケア学会誌、4 ( 1 ): 45 - 50、2020 .
- ・小山晶子、福島千尋、内田陽子、エンドオブライフケアライフ時期にみた利用者と家族に対する意思決定支援実施状況の特徴 特別養護老人ホームと介護老人保健施設との比較 -、日本エンドオブライフケア学会誌、4 ( 1 ): 15 - 25、2020 .
- ・内田陽子編著、山口晴保、伊東美緒・他、在宅と病院をつなぐ認知症対応力アップマニュアル、照林社、p163、2020.

#### 4 ) ホームページによる公表

bpsd.jp/の HP にて、社会貢献の欄：地域住民に対する EOLC 意思決定教育研修プログラム（人生の終焉のケア）を公表

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yoko Uchida, Turi Moki, Chieko Kubota	4. 巻 2
2. 論文標題 Change in the Preference for Place of Death among Community Residents through the Intervention of an End-of-Life Care Seminar	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Advances in Clinical and Translational Research	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 鈴木峰子、内田陽子、小山晶子	4. 巻 2
2. 論文標題 自宅療養を望み自宅死となった非がん終末期高齢入院患者の特徴 - 患者・家族の状況と入院中に実施された看護に焦点をあてて -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木峰子、内田陽子、小山晶子	4. 巻 2
2. 論文標題 自宅療養を望み自宅死となった日がん終末期高齢入院患者の特徴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	6. 最初と最後の頁 13 - 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 戸谷幸佳、梨木恵実子、吉田恭子、内田陽子	4. 巻 40
2. 論文標題 高齢者向け住まいにおけるACP支援EOLCパスの開発と有用性 実施率と必要性の検討 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 群馬保健学研究	6. 最初と最後の頁 8 - 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 内田陽子	4. 巻 4
2. 論文標題 介護・福祉の場におけるACP	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 在宅新療	6. 最初と最後の頁 491-495
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小山晶子、福島千尋、内田陽子	4. 巻 4
2. 論文標題 エンドオブライフケアライフ時期にみた利用者と家族に対する意思決定支援実施状況の特徴 特別養護老人ホームと介護老人保健施設との比較 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	6. 最初と最後の頁 15 - 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田陽子	4. 巻 4
2. 論文標題 エンド・オブ・ライフケア講演会前後における最後を迎えたい場所在宅と選択した要因、	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	6. 最初と最後の頁 45 - 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 福島 千尋
2. 発表標題 施設EOLC時期別にみた利用者・家族の意思決定支援実施状況の特徴 (その1)
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会 第2回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田 陽子
2. 発表標題 施設EOLC時期別にみた利用者・家族の意思決定支援実施状況の特徴（その2） -特養と老健の比較分析-
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会 第2回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 町田 留美
2. 発表標題 施設EOLC時期別にみた利用者・家族の意思決定支援実施状況の特徴（その3） - 介護保険施設が必要だと思ふEOLCの意思決定支援 -
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会 第2回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 茂木裕里、内田陽子、田島紫乃
2. 発表標題 地域住民に対するエンドオブライフケア研修前後の意思決定の変化
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア第1回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 内田陽子、田島紫乃、茂木裕里
2. 発表標題 エンドオブライフケア研修後の地域住民の希望
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア第1回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木峰子、内田陽子
2. 発表標題 自宅療養を望み自宅死となった非がん終末期高齢入院患者の特徴
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア第1回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉田恭子、梨木恵実子、内田陽子、戸谷幸佳
2. 発表標題 高齢者向け住まいにおけるACPを支援するEOLCパス
3. 学会等名 第66回北関東医学会総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 内田陽子編著、山口晴保、伊東美緒・他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 照林社	5. 総ページ数 179
3. 書名 在宅と病院をつなぐ認知症対応力アップマニュアル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考